

東日本大震災を乗り越えるために： 社会心理学からの提言

飛田 操
(福島大学人間発達文化学類)

話題提供にあたって

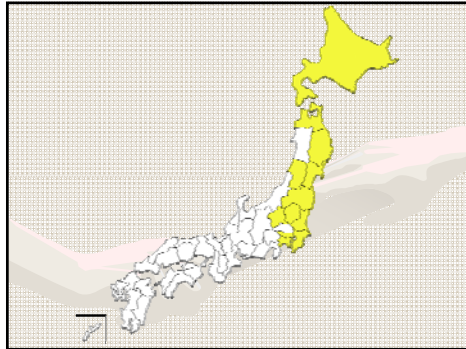
東日本大震災から6ヶ月が過ぎているが、震災は終わったという感覚はない。

収束しつつあるものの、震災は現在も進行中であり、したがって、現時点ではこの震災を対象化した冷静な分析や提言を行うことは困難である。渦中にある社会心理学の一研究者の個人的な感想としてとらえてほしい。

東日本大震災の特徴

特徴1 甚大な被害が広範囲に及んだこと

死者と行方不明者をあわせて20,000人。
亡くなった方は、北海道から神奈川県の12の都道県に及んでいる。



東日本大震災の特徴

特徴2 地震・津波・原子力発電所事故の多重複合災害であること

津波は特に壊滅的な被害をもたらしているし、原子力発電所事故の影響は生活・経済等も含め広範囲の。そして、おそらくは長期的な影響をもたらす可能性が高い。

複合災害であるために、「被災地」が

「地震だけの被害」、

「地震と津波の被害」、

「地震と津波と原子力発電所事故の被害」

といったいくつかの種類に区別され、この種類によって、被害の様相が大きく異なる。

東日本大震災の特徴

東日本大震災の特徴(まとめ):

甚大で広範囲な被害がもたらされており、複合災害の組み合わせにより、被災状況が多様である。

→ 被災の多様性に基づく相互の異質性をもたらす社会心理学的な問題が顕在化する可能性が高い。

被災者としての印象

(1)生活の確保と情報への渴望

被災直後は、朝起きてすぐに給水車に並び、その後、スーパーの行列に並ぶといった生活のための活動に多くの時間がかかったために、これらが中心とならざるを得ないが、それと同じくらい「情報への渴望」が大きかった。



仙台でデート中に被災し、避難所となった宮城県庁の食堂で2日間を過ごしたゼミ生

「先生、避難所だった食堂のなかでも、とてもいい場所とあまりよくない場所があるのですよ。どんなところがベストポジションかわかりますか？」

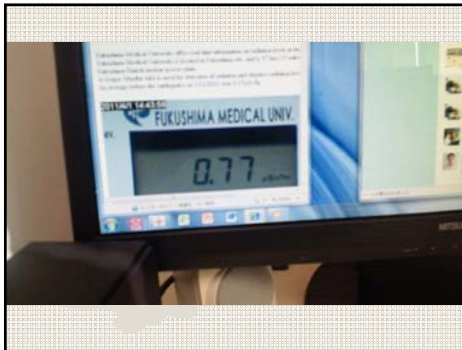
彼女のいう「いい場所」とは、食堂のなかでも、「テレビ」が見られるテーブル席。

被災直後においては、テレビがとても大きな情報源であり、テレビからもたらされる情報が非常に重要な意味を持っていた。

「二度とあの経験はしたくないが、もし今度避難所に行くようなことが起こった場合は、まさきにテレビの前を確保したい」とのこと。

枝野官房長官(当時)のテレビ会見を熱心に見入っていたのもこの時期。

特に、現在の状況を説明したり解説してくれる情報(いったい今、何が起きているのか)、そして、今後を予測してくれる情報(これから何が起ころのか)といった情報はとても有用であった。



もちろん、テレビで得られる一般的な情報への渴望も大きかったが、同時に、家族や知人の安否、地域コミュニティの現状など個別的な情報への渴望も大きい。

このような個別的な情報については、携帯電話がほとんどつながらなかったために、電子メール、SNS、twitterなどのソーシャル・メディアが大きな働きをしていた。

被災者としての印象

(2) ソーシャル・サポートについて
情緒的なサポートは、支えとなる。世界中からの「pray for Japan」だけでも、心強く感じた。

余震が続き、原子力発電所事故の状況が不明なため、怖い、心細く不安なので、情緒的なサポートはとても効果的。

ただし、「がんばれ」や「がんばって」という言葉には、気持ちはありがたいが、他人事の発言のような印象を受けた。

「がんばっていない訳ではないし、何をどうがんばればいいのかかわからない」という感覚。

「一緒にがんばろう」や福島弁で「がんばっぺ」なら、嬉しい。

道具的なサポートについて

震災直後から、一ヶ月程度、宅配便や郵便が止まっていたので、タイムリーな援助は難しかったのではないかと。

宅配便が復旧してから、個人的にいろいろなお支援をいただいた。ただ、すでに暖かくなってから携帯カイロが届いたりといったことが生じた。

道具的なサポートの有効性は、サポートを受ける人が置かれている課題状況に依存しているため、道具的なサポートが有効に機能するためには、相手の置かれている状況の理解が重要。
→ 被災状況が多様なため、被災者が置かれている課題状況もきわめて多様。ニーズを把握した個別的な支援やサポートが必要。



社会心理学者として何ができるのか

福島大学の体育館も避難所(国立大学では唯一)となり、多いときで100名を超える方々が避難されてきていた。
避難した方々を目の前にすると、「君は何ができるのか」が問われることになる。

勤務しているのが、教員養成系の学部なので、体育の先生方は、エコノミークラス症候群の予防のための運動を、家庭科の先生方は炊き出しを、臨床心理学系の先生方は心のケアをそれぞれ担っていた。
では、「社会心理学者として何ができるのか」が突き詰められた。自分の存在価値はどこにあるのだろうか？



もちろん、個人としてできることがないわけではなかったのだが、4月に、ぎっくり腰になってしまったので、がれき処理さえできない。

いろいろ考えて、社会心理学者としての自分ができる3つのことがあると思った。

第一は、自分の研究の推進。役に立つかどうかは問題ではない。研究者として研究を推進するのは当然。

第二は、学生の教育。復興には中長期的な取り組みが必要である。そのために、有用な人材を育成輩出していくことが高等教育機関に勤務するものとして重要。

→ ただし、多くの学生が福島から避難していたため、教育したくても目の前に学生がいないという状況が続いた。

そして第三は、情報の発信。被災時には「いったい今、何が起きているのか」、そして「これから何が起ころのか」といった状況を説明してくれる情報や今後を予測してくれる情報が有用であったことはすでに述べた。

もしかしたら、被災地にある人たちも、社会で今どのようなことが起きているのか、これからどのようなことが起ころのかについて、社会心理学的に解説した情報を求めているのではないか。

「不安を感じると、他者と一緒に行きたい」と、「手段、目標関係が不明確であるといった状況要因がリーダーシップの効果性に影響する」といった社会心理学者にとっては常識であるような情報でも、現状との関係から解説・説明できれば、有用な人もいないのではないか。そこで、一般市民向けの情報をブログやツイッターで提供した。

→「こんなときにも教育者」シリーズ

こんなときにも教育者：シリーズNo.15
内集団と外集団

先ほど、「私たち福島県民は、あなたがた東京都民に怒っている」といった例をあげました。これは単なる例ですので、その正誤を問題にしないでください。この例で説明したいのは、ここでは、「わたしが所属している集団」と「わたしが所属していない集団」とが相対化され認知されているということです。「わたしが所属している集団」のことを「内集団」といいます。

英語では、()です。この内集団と比較されたときの「わたしが所属していない集団」のことを「外集団」といいます。英語では、()です。内集団や内集団の成員に対しては、人々は特別な行動を取ることが明らかになっています。たとえば、「われわれ感情」というのをいただきます。同一視と一体感の感情が生まれるのです。また、内集団の成員にたいして、成員の利益を増すような行動が生まれることがあります。内集団成員にたいする一種のえこひいきのような行動なので、「 」といえます。英語では()です。

このひいきは、すごく簡単に生ずることがわかっています。たとえば、たまたま同じ避難所に避難している人たちのなかにも生まれます。「私たちの避難所」と「それ以外の避難所」が相対化され、「私たちの避難所」の人たちへのひいきとなる場合があります。

このひいきが内集団にたいしてだけ起こるのでしたら、あまり問題はないのですが、危険なのは、「 」の背景に外集団にたいする敵対性や排除性が生まれてしまう場合があることなのです。

シェリフという人は、子どもたちのサマーキャンプを利用して、子どもたちをふたつのグループにわけました。すると、子どもたちはだんだんと自分と同じグループの成員には好意的な行動を示すようになってきたのですが、同時に、相手グループの成員に敵対的な行動、ときには暴力的とも言えそうなくらいの行動を示すようになってしまったのです。

では、このふたつのグループが仲良くなるにはどうしたらいいと思いますか？

シェリフは、最初、ふたつのグループを一緒に過ごしてもらえば、仲良くなるのではないかと考え、いろいろな活動を一緒にさせるようにしてみました。すると、どうなったでしょう？

その結果、ふたつのグループは、ますます敵対してしまいました。一緒に鑑賞していた映画の上映を途中で止めざるを得なかったくらいだとのことでした(たぶん、このあたり資料がないのでふたしか)。

次にシェリフは、ふたつのグループが相互に協力しないと目標が達成できないような事態を作りました。たとえば、給水車から給水するためには、ひとつのグループではだめで、ふたつのグループが協同することで始めて目標が達成できるような事態を設定したのです。これにより、ようやくふたつのグループのあいだに和解的で友好的な雰囲気を作られていったそうです。

クラスのみなさんのなかにも、「自分たちは」と内集団を特定し、それに同一視している人もいらっしゃるかもしれません。内集団は自分を安定させたりするには、とても大切な役割を果たしています。しかし、内集団を特定することには、同時に外集団を設定していることにもなりかねません。そして、内集団への好意的行動だけでなく、外集団への敵対的な行動さえ誘発されかねないのです。

いまは、内集団だけを大切にしている場合ではありません。人類全体が内集団ともいえるような危機的な状態なのです。敵対的な行動は慎んで、大きな視点で自分の集団をみていてくださいね。

日本社会心理学会の取り組み「東日本大震災に関する社会心理学からの提言と情報」特設サイトは役に立ったのか？

特に「役に立ったか」を問う場合、「誰に対して、どのように」役に立ったのかを検討すべきであろう。
少なくとも社会心理学者には役に立った。
しかし、社会心理学の専門性をもたない人たちにとっては難解な内容が多かったように思える。

(1) 社会心理学の有用性(限界も)を社会的にアピールできた。大学院生をはじめとした若い研究者が積極的に情報発信していた。

(2) 重要な情報が提供されたとともに社会心理学者たちの「被災者のために何かしたい」という気持ちが伝わってきた。
社会で「何が起きているのか」、「これからどんなことが起こるのか」という情報はとても有用。
道具的な機能もちろんとても重要だが、情緒的なサポートがありがたかった。

(3) ただし、被災していると、落ち着いて文章を理解する努力をすることはとても困難。
したがって、難解な解説や説明より、容易でポイントが明確な解説や説明のほうがありがたかった。おそらく、被災された方々もそうであったのではないか。

専門性と一般を結びつけるミドルマン(ミドルパーソン)的な存在が必要なのではないか。

「こんなときにも教育者」シリーズは、被災地域で起きている出来事を、学生に対する情報提供のかたちで広く一般のみなさまにも理解していただくとする試みであった。

社会心理学者への
ちょっとした思いつき程度の提言

(1) 相互信頼の形成研究
SPEEDIの情報公開を巡って、細野豪志首相補佐官(当時)が4月25日の記者会見で全て公開すると発言。だが、5月1日夜になって約5000枚もの未公表の試算結果があることが判明。細野氏は2日の会見で「(公開しなかったのは)市民に不安を与え、パニックが起きるのを恐れたため」と謝罪した。

細野氏の発言は、「市民の健康よりパニックを心配している」、「市民はパニックを起こすという前提に立っている」点できわめて問題。

国民が政府を信頼しているかどうか以前に、政府が国民を信頼していないのではないか？

(2) 緊急時のリーダーシップと集団意思決定

状況が緊迫していて短時間で意思決定しなければならぬこと、そして、この判断が誤りであった場合、その損失がきわめて大きいことが緊急時の集団意思決定の特徴。

緊急時のリーダーシップと集団意思決定の特徴や効果性について検討する必要。

(3) ユーモアと精神的健康度

笑いの力は大きかった。
デーブスペクターさんのダジャレでさえ、元気になった。

(4) 多様性・異質性をもたらす社会心理学的問題

被災した人と被災しなかった人、
人的被害を受けた人と受けなかった人、
原子力発電所事故の影響を被った人と被っていない人、

低線量の被曝を危険性を高く判断している人と低く判断している人

と被災の内容も種類も多様であり、相互の異質性が顕在化している。

異質性の顕在化は、相互のコミュニケーションや合意形成を困難にさせるだけでなく、相互の情緒的魅力的低減をもたらされたり、感情的な対立が生じる可能性を高める。→ 現状？

では、どうすればいいのか？

今回の震災に当たり、多くの方々からの暖かいご支援をいただいた。心より感謝します。

ただ、復興にはまだまだ多くの時間と努力が必要になります。今後ともご支援の程、くれぐれもよろしくお願いいたします。